

## あとがき

箕輪政博

社会鍼灸学研究会副代表

第11回社会鍼灸学研究会は総括的に制度史を概観した。江戸時代、近代から戦後を経て現代に至る史実が徐々に明らかになり、明治大正昭和時代の実情が垣間見えてきた。それと同時に、研究者間でこれまで常識的だったことに認識の違いがあるということも感じた。しかし、私はこのことは喜ばしいことだと思っている。これまで、日本の鍼灸の近現代史について、あまりにも史実の提示と検証が少なすぎた。だれも、研究眼的に鍼灸の近現代史なんて見てこなかったわけだから、やっとディスカッションが始まったという証左である。

このことこそが本誌『社会鍼灸学研究』の成果であり、研究会の存在意義であった。

誰からも日本の鍼灸の制度史を検証せよなどと言われてはいない。我々の出自や社会における立ち位置を知りたいと思うのは自然な成り行きなのだ。さらに、ディスカッションを重ねその成果を還元して初めて「研究」としての意義が成立するのである(と代表のささやく声が聞こえる)。

日本という国は鍼灸の未来なんて考えていない。しかし、何か事が起これば、一応、意見は聞き、国家の恣意や権力で事を決めるのだ。本研究会の成果である近現代史実の検証でそれが徐々に判り、今、まさに進行している「療養費」の見直し問題もそうだ。

微力の抵抗と未来を考える戦略の一助に、という想いが少しでも資すればいいのだが。

最近、日本の歴史が大きく塗り替えられている。史実と異なるという理由で教科書から「聖徳太子」という呼称やお札で有名な顔がなくなり、江戸時代の「鎖国」という用語も使用しなくなっているらしい。これは、昨今の歴史研究伸展の成果だという。社会鍼灸学研究はまだ始まったばかり、未来の日本の鍼灸のために近現代史を塗り替えようではないか。

皆様の暖かいご支援でディスカッションの場に戻ることができました。この場を借りて御礼申し上げます。

(2017/07/14、自由の象徴、パリ祭の朝)